

●特集Ⅱ「子ども虐待」はなぜなくならないのか——I・子育てで困難・子ども虐待の現在

——子育てで困難にどう対応するか

「甘え」の世界からみた子育て困難

——アタッチメント研究で捨象されてきたもの

西南学院大学大学院臨床心理学専攻

小林隆晃

はじめに

虐待臨床においてアタッチメント形成の重要性はいまや誰しも認め、それは生涯を通して人間の成長発達にさまざまな影を落とすことも明らかにされた。しかし、アタッチメント形成過程でなぜ虐待という事態にまで発展するのか。それは単に親の養育の質によるものなのか。それとも子どもの素質も関係するのか。虐待防止を考える上でもぜひとも究明しなくてはならないこの種の問題について踏み込んだ研究は乏しい。なぜならこれまでの研究の多くは虐待が生じた後に後方視的にその成り立ちを推論するしかすがなかったからである。

虐待された子どもたちにアタッチメント行動の種類でDタイプ（無秩序／無方向型）が非常に多いことが明らかにされたとしても、

それは結果であって、虐待の成因を直接示しているわけではない。親子間でなぜ虐待という深刻な事態が生まれるのかを考えるためには、その関係の内実に肉薄していくことが臨床家に求められる。

従来のアタッチメント研究が捨象してきたもの

行動観察に基づくアタッチメント研究

このようなことを考えているなかで、最近筆者は臨床心理士の卵たちに、産後うつの母親と子ども（一歳〇カ月）の新奇場面法（以下SSP）を供覧して気づかされたことがある。そこで筆者が強く印象づけられたのはある女性の反応であった。彼女は学生時代からアタッチメント研究を手がけ、SSPについ

てもそれなりの知識を有していた。筆者がこの母子関係の特徴を問うと、彼女はしばし考えて「母親に対する（子どもの）回避性」と答えた。その根拠を問うと、子どもは視線をそらし母親を回避している、母子とも互いに目を合わさない、子どもは遊びを楽しめていない、母親も子どもへの関心が薄い、といった母子各々の行動特徴を丁寧に指摘した。筆者はこの回答にアタッチメント研究における観察者の態度の特徴の一端を垣間見る思いがした。それは何かといえば、子ども（あるいは母親）の行動を観察するということに徹していたからである。これはある意味では当然の結果であったが、筆者がこの事例を供覧した主たる目的は、この母子間に流れている息詰まるような空気、つまり不安と緊張、さらにその結果生じる母子双方の多様な反応につ

いて、その意味を検討することであった。

行動パターンの評価ではなく日常語で把握することの大切さ

筆者は、この事例の母子関係の最大の特徴を、「子どもは母親の前ではことさら背を向けて回避的態度を取って『拗ねている』が、母親が退室するとまもなく強い不安に襲われて泣き始め母親を求めるようになる。しかし、母親と再会し抱かれると途端に身体をよじって再び回避的態度を取る」ところに求め、その関係病理を「あまのじゃく」という日常語で概念化した⁽¹⁾が、アタッチメント研究では子どもの行動に焦点を当てるがゆえに、筆者のような母子の関係病理を捉える視点は持ち合わせていないことを改めて再認識させられたのである。

それと同時に関係病理を捉えることは筆者が想像するよりもはるかに困難なことなのだということも思い知らされた。それが困難な理由のひとつに、先に述べた「母子間に流れている息詰まるような空気、つまり不安と緊張」を感じ取ることが捨象されていることが大きく関係していることは明らかだった。

筆者の関係論的視点からすれば、この母子間に立ち上るアンビヴァレンスゆえの「強い不安と緊張」がどのようにして生じたの

か、それを明らかにすることを治療の根幹に据える必要がある。なぜなら母子ともその「強い不安と緊張」をなんとか紛らわそうとしてさまざまな対処を試みているが、それが双方の関係にさらなる悪循環を生んでいるという関係病理を見てとることができからである。みずから体感している「強い不安と緊張」に当事者自身は気づくことがむずかしい。しかし、臨床家はそれに気づき、直接治療のなかで取り上げることが不可欠だと筆者は考えている⁽²⁾。

なぜ母子間の情動の動きが捨象されるのか

「母子間に流れている息詰まるような空気」は、臨床家もその場に関与し間主観的に感じ取るしかすべはない。したがって行動観察に重きを置いてアタッチメント・パターンを捉えようとする者が間主観的にしか感じ取れないものはさほど価値のないものとして捨象するのは当然である。しかし、臨床家が当事者のこのころの動きを捉えることは治療を考える上で必要なことであるのはいわずもがなである。それにもかかわらず、それを感じ取れないのは単に学問的な立場の違いといった単純な問題でもないことがその後の議論で明らかになった。

彼女は「抽象的概念を用いすぎる自分を発

見し、自分自身の生きたことばを用いること」の重要性に気づくようになったからである。なぜかといえば、彼女は他の事例の供覧を通して、自分自身の幼少期において両親に甘えることへの強い苦手意識（アンビヴァレンス）があることに気づいた。母親に強いアンビヴァレンスを抱く子どもの事例を観察した際に、自分自身の過去の「甘え」体験が賦活化され、みずからのアンビヴァレンスに直面することに強い不安が生まれたことに否応なく気づかされたからである。

なぜアタッチメントではなく「甘え」なのか

行動科学を基盤としたアタッチメント研究においてもっとも重視されきたのが「客観性」である。その成果の一例をアタッチメント・パターンの分類に見ることができが、このようなパターン評価という作業は臨床家にとつて何を意味するか、真剣に考える必要がある。本来、臨床家が目指すのは患者のところに肉薄した理解とそれに基づく治療である。

パターンの評価は患者のためではなく、研究者たちが研究する上で重要な枠組みとして採用しているものである。世界標準となつていくゆえ、それなくしてみずからの研究成果を世界に発信することは困難だといふ今日の

研究事情はよくわかる。しかし、それをそのまま現実の臨床の場に持ち込むことの弊害についてわれわれはもつと自覚的になる必要がある。それが先の臨床心理士の卵の発言に見てとることができる。パターンの分類という作業は、患者を客観的に、つまりは主観（主観も含め）を抜きにして捉えるゆえ抽象度を高め、実態から距離を取るものであつて、関係そのものに迫るものではない。この子どものアタッチメント・パターンはDタイプであると評価することが子どもあるいは母子関係の理解と治療においてどれほどの意味を持つのであろうか。

まずもつてわれわれが目指さなければならぬのは、母子間でいかにデリケートな関係が繰り広げられているか、その実態を生きたことばで、つまりは当事者のこころ（情動）の動きにもつとも相応しいことばで把握することである。それをせずして母子の関係病理の核心に迫ることはできないと思うからである。

具体的な事例を通して考える

〔事例〕二歳九カ月 男児

頭突き、衝動的行動などを主訴に祖母と母子三人での受診。満期出産。陣痛開始は早か

つたが、分娩に時間がかかり鉗子分娩で出産。仮死状態で傷だらけだったというが、母親は子どもを直に見ていない。特に発達に気になることはなかったが、一歳五カ月、てんかんを発症。通院中の病院で二歳半の時に自閉症といわれた。以来、母親は気分が落ち込み、うつ病として他院で治療中である。子どもと付き合っていると、どうかなりそうで、叩きたくなる。子どもは母親が嫌がることを好んでやるので、母親のイライラは募るばかりだという。

以下SSPでの特徴である。

子どもは見るからに面白くなさそうに動き回っている。子どもは椅子に座っている母親にさりげなく近づき、背を向けて寄りかかるが、母親は戸惑っている。そうかと思うと、急にドアに背を向けながら後頭部をドアに打ち付ける。母親は「痛いよ」と注意をするが、ことさら注意されることをねらつてやったようにみえる。ストレンジャー（以下ST）が入室して母親の前に座ると、子どもはすぐ近寄つてSTに背を向けながら寄りかかる。母親が退室しても特に反応することなく、子どもはSTの手を引いて動き始める。しかし、相変わらず無気力で気の向くままに動いているだけで、楽しい雰囲気は生まれな。再び母親がドアを開けて入室しそうな

ると、すぐに気づいてドアに駆け寄る。しかし、母親が入つてくると、母親を避けてドアに直接ぶつかると、両手で当てる。その後も相変わらずの動きで、母親が退室しても何事もないかのような態度で、ひとりで過ぐす。STが入室しても変わりなく、代わつて母親が入室しても母親に目を向けることなく、ひとりで遊び続ける。

初診時の病歴聴取で虐待が強く疑われた事例である。筆者はSSPの枠組みを用いて母子関係の観察を行ったが、アタッチメント・パターンの評価に意を注ぐのではなく、「甘え」の観点から母子関係のデリケートなこころの動きを感じるままに素朴に捉えることを心がけた。

するとSSP全体を通して母子間に流れているなんともいえない緊張感が伝わり、子どもはあの手この手を使って母親の気を引こうと懸命にもがいている姿を捉えることができた。具体的には、子どもが母親に背を向けて寄りかかることで、わざとらしく母親に甘えてみせているが、それは「媚びを売る」姿を彷彿とさせる。また、子どもは「すぐ近寄つてSTに背を向けながら寄りかかること」で、母親の前で見知らぬ女性に甘えてみせているが、それは母親に「当てつける」姿である。そして、母親が入室しても母親に目を

向けることなく、「拗ねた」態度を取っている。

〔事例〕三歳〇カ月 男児

食事をひとりで食べることができない、集団の中できちんとした行動がとれないとの相談で受診。妊娠三五週で出産。難産で仮死状態での出生。身体運動能力はキャッチアップし、二歳までは順調に経過。二歳一カ月の時、療育センターで自閉症と診断され、その後両親同伴での受診となった。母親が食事や排泄をしつけようとすると嫌がり、手に負えない。その一方でいくつもの習い事に通わせている。

気持ちと裏腹なことをする。集団の中で落ち着かない。外出するとテンションが上がりつ放しで落ち着かない。語りかけるとオウム返しをする。難しいことはすぐに覚えるのに簡単なことができない。父の話によれば、母親は子どもが自分の言うことを聞かないと常々訴える。子どもが自分の思うようにならないと、大きな声で当たり散らし、軽い暴力を振るう。子どもは怖がっているのではないかという。

以下SSPでの特徴である。

ふたりで自由に遊んでいる時、母親の声かけにまったく応答することなく、背を向けて

黙々と遊んでいる。しかし、誰かに相手をしてもらいたいという気持ちはとても強く、STが入った途端に、自分から積極的に関わろうとする。母親を前にしてその存在を無視するようにして、STに積極的に働きかけて遊ぼうとする。ただ、それがあまりにも一方的で、なんとか相手をしようと努めるSTではあるが、気分が高揚してはしやぐ子どもについていけず、困惑気味である。母親との分離と再会時には、一見何もなかったかのように振る舞っているが、それでもひとりきりになった時ため息をつき、心細さからくる不安と緊張の高さがうかがわれる。STとの再会場面になると、ついき先ほどまで心細い体験をしていたにもかかわらず、何もなかったかのように平然とSTに自分から先ほどと同じように関わる。子どもの一方的な関わりが印象的である。そこでの子どもの気分の高揚感

は軽い躁状態と言っても良い。

なぜ子どもがSTに対してこのように一方的に関わるのか。母親の子どもへの関わりを見ることによつてその理由が見えてくる。親は子どもの遊びの流れにまったく関係なく唐突に働きかける。夢中になって遊ぼうとする子どもに、STの存在を意識してか、突然自分の名前を言わせようとする。母親は常に何かに囚われ、子どもの思いに沿って関わるこ

とができない。子どもから見れば、母親の働きかけは予測しがたいため、母親を無視して自分独自の世界を作ることでは自分を保つことは難しいことが推測される。

この事例でも、「背を向けて黙々と遊ぶ」ことで「拗ねている」ことがわかるし、「母親を前にしてその存在を無視するようにして、STに積極的に働きかけて遊ぼうとする」ことで母親に「当てつけている」ことが伝わってくる。

関係病理を理解するためには

行動の意味は文脈を通して初めて理解することができる

筆者が子どもと母親に対して振る舞う行動をこのように読み取ることができたのは、「母子間に流れている緊張感」を感じ取りながら母子関係の様相を観察したからである。子どもの一つひとつの行動のみを取り出すだけでは困難な作業である。なぜなら「母子間に流れている緊張感」に彩られた関係という文脈を通して観察することで初めて一つひとつの行動の意味が明瞭に浮かび上がるからである。そこには外国語の単語を理解しようとする際に、単語の意味は文脈によつて規定さ

れることから、文章の中の単語として一括りにして学ばなければならぬことと同じ原理を見て取ることができる。

子どものアンビヴァレンスへの対処行動には怒りが内在している

母親に対して「甘えたくても甘えられない」子どもたちはみずからの不安と緊張に對してさまざまな対処を試みるが、とりわけ虐待関連事例においては、その対処法は多様性を帯びる。それは子どもから見ても母親の出方が唐突で容易には読み取れないからである。

先の事例でわかるように、「媚びる」「当てつける」「拗ねる」といった行動の背後に子どもの母親に向ける潜在的な強い怒りを感じ取ることができるが、このような子どもなりの精一杯のしがきは、母親にも怒りを誘発させるものとなる。

このように母子双方の潜在的な怒りが両者間の関係にさらなる負の循環を生む。そしてついには際限のない泥沼の関係へと発展していく。虐待はこのようなプロセスを経て生じると思われるのである。

母親にみられる他者に認めてもらいたいという強い欲求

虐待がらみの事例の面接で、親に対する否

定的な言辭を少しでも語ると、途端にドロツプアウトすることは、虐待臨床を経験した臨床家であれば誰でも理解できよう。みずから子どもに暴力を振るっているにもかかわらず、自分が他者から否定されたり非難されたりすることには驚くほど過敏である。そこには自分が他者から認めてもらいたいという強い欲求が潜んでいる。なぜならこれまでそのような経験がなかったからである。後者の事例の母親にみられる唐突な子どもへの働きかけの背景にそのような母親の心理を推測することができる。

おわりに

大人の患者の精神療法で治療関係が深まってくると、虐待された経験（不適切な養育体験）を語り始める事例は驚くほど多い。そのような事例の精神療法において、治療関係が劇的に変化する転機となるのは、面接の場で〈患者—治療者〉関係における相互のこころの動きを取り上げたときである。先の事例でいえば、「母子間に流れているなんともいえない緊張感」を感じ取ったことを指す。なぜなら、この種の〈患者—治療者〉関係に立ち上る間主観的な体験は、患者自身の幼少期から一貫して継続してきた対人的構えを示唆するからである。母子臨床であれ、大人の面

接であれ、ともに二者間に立ち上る情動の動きを捉えることは、治療の核心につながるものである。行動に特化した臨床的態度がいかに相手のところからかけ離れたものか、多少なりとも理解していただけるのではなからうか。

〔文献〕

- (1) 小林隆児『あまのじやくと精神療法—「甘え」理論と関係の病理』弘文堂、二〇一五年
- (2) 小林隆児『発達障碍の精神療法—あまのじやくと関係発達臨床』創元社、二〇一六年